

会議録

- 1 開催した会議の名称 佐賀県酪農及び肉用牛生産振興審議会
- 2 開催日時 令和 7 年 1 2 月 2 3 日 (火) 1 3 時 3 0 分から 1 5 時まで
- 3 開催場所 ホテルグランデはがくれ (佐賀市)
- 4 出席者 (委員 12 名) 山中委員 (会長)、安田委員、南川委員、田中委員、中島委員、中山委員、鈴山委員、塚島委員、中尾委員、干貝委員、御厨委員、井原委員 (事務局) 農林水産部 (島内部長)、畜産課 (石松課長、長野副課長、宮原係長、山口係長、井手口主任獣医師、山本主査、弓削主査)
- 5 議題 「佐賀県酪農・肉用牛生産近代化計画」の策定について
- 6 会議録
 - (1) 事務局から資料 3 により説明を行った。
 - (2) 質疑応答の概要は以下のとおり。

(南川委員) 家畜の安全とは? また、GAP のみが記述されているが、HACCP の方が県内で推進しているため、HACCP も記述してみては?

(事務局) 家畜の飼養上および畜産物を提供するにあたっての代表的な安全確保を想定している。

GAP 等の「等」に含んで記述していたが、HACCP も記述する方向で修正する。

(南川委員) 肥育牛経営の算定根拠にも使用されている「枝肉重量 580kg」、「枝肉単価 2,416 円」は、かなり高い目標を掲げているため、それに応じて生産費も上昇すると考えられるが、生産費のみ令和 5 年度の数値のままでは経営的に合わないので?

(事務局) 枝肉重量の目標は、県の和牛改良方針の改良目標値としている。高い目標を設定しているのは重々承知しており、その目標を目指して取り組んでいくこととしている。また、近年の改良では、余剰飼料摂取量について注目が高くなっている。より少ない飼料給与で牛が大きくなるよう改良が進んでいる。コスト面にはこのことも踏まえている。

(安田委員) 酪農及び肉用牛の戸数は減少の幅が大きいように思うが、どのように算出しているのか。

(事務局) 酪農については、戸数が少ないとから全酪農家の年齢を把握し、一定年齢で離農することを想定して目標戸数を算出している。肉用牛については、農家の年齢構成等を踏まえ、実際に直近で離農された実績等を考慮し、算出している。新規者確保は非常に難しいが、できる限りの対策に取り組みたい。

(千貝委員) 今年は夏場の酷暑により、乳量が15%ほど減少した。消費低迷もあるものの、学乳の確保のために他製品の製品を縮小することで対応した事もあり、農家戸数の減少は実感している。その中で、どうやって維持・増加させるのか?研修機能を充実させて、新規者を確保していくことは重要。新規者が魅力を感じるものとしてもらいたい(収入アップなど)。生産量の維持等のためには、戸数を増やすか、技術をあげるか、となるため、私としては目標の飼養戸数よりもっと減少すると考えていたため、前向きな目標と感じた。

(塚島委員) 酪農経営には休みがなく、労力が大変掛かる。そのような中、酪農ヘルパーには大変助けられているものの、佐賀県のヘルパーも1名辞められ、増える予定がない。今後は、搾乳ロボットを導入する必要もあると考えているが、高額なため導入に向けた支援等があると大変助かる。

(山中委員) 輸出施設が県内にあることで価格等に影響はでているのか?輸出するほうが枝肉単価が高ければ、農家の手取りも増えると思うが。

(事務局) 輸出しても農家手取りは国内販売とほとんど変わらない。しかし、国内だけでなく海外にも販路があることで需給調整(高級牛肉が国内でだぶつく場合、海外へ積極的に輸出する等)を図ることができる。

(田中委員) 輸出のハード的な支援は整ってきてているが、ソフト的な支援は無いように感じているため、その点も考えていただきたい。また、枝肉が大型化しすぎると業者からは取り扱いに困るといった意見もある。加えて、肉質に係る指標も考えていく必要があると思う。

(山中委員) 前回の令和2年度に策定した計画書の技術目標値を、どの程度達成しているか?そのうえで、今回の計画に反映されているかを教えていただきたい。

(事務局) 前回計画との比較したデータは無い。今回の技術目標においては、高い目標を設定している項目もあれば、自然と達成できると思われる項目もある。繁殖牛経営を例とした場合、経営に直結する分娩間隔は高い目標を設定しており、子牛出荷日齢については自然と達成可能な目標を設定している。

(中山委員) 担い手の確保に関する具体的な取組はあるか?

(事務局) 事業継承の取組は、JAが空き牛舎をあっせんし、増頭したい農家等へ紹介されているため、県内で無駄になっている事例は少ないと伺っている。しかし、昔ながらの家の横にある牛舎等は、生活の一部であるため、継承等が難しいといった事例もある。伊万里のほうでは、JAが離農しそうな農家の牛舎を把握し、規模拡大意向がある農家にあっせんしているため、開いている牛舎はほとんどない、といった話もある。

(南川委員) 技術目標の数値において、繁殖牛経営の子牛出荷日齢は270日齢程度であり肥育牛経営の導入月齢は去勢で8.5か月、雌で9.0か月齢とずれがあるが、ここは同じにならないのか?

(事務局) 繁殖牛経営と肥育牛経営を別々で考えているため、ずれが生じている。肥育農家は繁殖農家の出荷先である多久市の市場以外からの導入が多いため、子牛の出荷月齢と導入月齢は異なる(一致しない)。そのため、このまま別々の考え方で整理させていただきたい。

(中山委員) 畜産農家は常々、堆肥の処理に困っている。玄海町のバイオガス発電所が稼働を停止し、1年以上畜産農家は自分で堆肥処理をしている。稲わら収集をする先の耕種農家とも話をするが、良い折り合いをつけられる方法があれば、堆肥の効率的な供給が可能となると考えているので、是非ご助力いただきたい。

(御厨委員) 畜産農家と耕種農家との連携を推進するための仕掛けは、佐賀県内においても数多く実施してきた実績もあるが、どれもうまく定着に至らなかった。

(事務局) 畜産試験場では、化石燃料を必要としないペレット堆肥の製造に向けた試験を新たに検討している。肥料高騰の影響もあり耕種農家から堆肥を撒きたいとの声もあるが耕種農家は機械が無いため上手く進んでいない状況、今回の意見を参考に前向きな検討を進めていきたい。

(御厨委員) 散布機械が無いことも課題であるが、一番大きな課題は散布するにあたり耕種側にストックヤードが必要となること。誰がどこまでやるのかという線引きも難しい。

以上